別紙様式1

令和5年度　幸崎小学校　学校評価表

（　中間・最終　）

三原市立幸崎小学校　　校番（　15　）

a 学校教育目標	「自ら伸びる　ともに伸びる　子どもの育成」	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】（自校の使命）　自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン】（自校の将来像）　小中一貫教育を進め、小1プロブレムや中1ギャップのない、子どもの通いたい学校、保護者が通わせたい学校づくり

評価計画								自己評価					改善方策	学校関係者評価			
	c 中期経営目標	d 短期経営目標		e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g目標値	10月 h達成値	2月 h達成値	i達成度	j評価	k結果と課題の分析	n改善方策	l 評価 イ	ロ	ハ	mコメント
確かな学力	○【幸崎思考力】を発揮し自律的に学ぶ子どもの育成【NRT偏差値平均　55以上】	教務・研究部	◎幸崎思考力を育む授業改善による、学力の向上 【単元末テスト80%以上 児童アンケート肯定的評価80%以上】】	【授業改善】 ①3つの自己選択・自己決定の力（思考スキル・ツール、ICT、学習形態）を鍛える場の設定 ②ホワイトボードICTを活用した協働的なグループ学習の展開（幸崎モデルの構築） ③幸崎っ子10の姿を視点とした振り返りの充実	単元末テスト	平均得点率80%以上	100%			B	単元末テストの結果は、国語科が82.8点、算数科が80.9点であり、達成度は100%であった。幸崎っ子10の姿のアンケートでは、10項目中8項目が肯定的評価が80%以上であった。 〈成果〉 3つの自己選択・自己決定の場を設定したり、ICTを活用したりすることで、自律した学習者として主体的に学びに向かう姿勢が見られるようになった。 幸崎モデルの作成により、国語科は、児童が問いをもち、他社と比較しながら自分の考えをもつてるようになってきた。算数科は、児童が問題を選択したり、児童同士で授業をすることで、学び合う姿勢が高まってきた。 〈課題〉 児童が主体的に学び合うための教師のファシリテートの工夫が必要である。	○自律した学習者として児童が主体的に学ぶことができるよう、さらなる手立ての工夫を組織的に考え実行する。 ・自分で学びを自己調整できるように、国語科、算数科の振り返りの視点を明確にし、毎時間学習の最後に振り返りの時間を設定する。 ・児童が主体的に学び合うことができるように、環境構成（既習の掲示、ヒントカード、学習コーナー等）や対話を深めるための切りかえし発問、誤答の提示、思考の価値づけ・意味づけなど教師のファシリテートの工夫を行う。	◎			・ホワイトボードを活用して、思考の整理をする活動がよい。 ・基礎学力を定着させるために、どう自律的に学習するか、さらなる工夫改善が必要である。 ・設定している「幸崎っ子10の姿」が現れている場面が授業の中で見られた。 ・ICTが教育活動の中で積極的に活用されており、定着していると感じた。 ・学習についていけていない児童もいると思うので、個別最適な学びの推進をICTを活用しながら取り組んでほしい。 ・子どもの主体的な学び合いを大切にしながら、基礎学力の向上に向けた丁寧な取組もされていた。 ・グループでの課題解決に向けて討議する中で、自ら主体的に向かう姿勢を今後とも育んでいただきたい。
				【個別指導の充実】 ①全学級で支援が必要な児童への複数対応による補充学習 （支援が必要な児童には四則計算の徹底を重視） ②思考・判断・表現力向上に向けた幸崎検定テストの実施 ③スモールステップでの成果の見取り	児童アンケート	肯定的評価80%以上	80%				モジュールの時間において、国語科、算数科の活用型のプリントを作成し、全校一斉に取り組んだ。 〈成果〉 モジュールタイムにおいて四則計算を徹底したり、複数対応による補充学習を行ったりすることで、C評価の児童への支援が充実してきた。 〈課題〉 国語科は書くこと、算数科は数量関係において、本校が課題としている問題について、十分に力がついているか疑問が残る。	○国語科、算数科それぞれの本校の課題をどのように改善していくか、校内研修等において全職員で意識統一していく。 ・国語科においては、教師が手本を示したり、児童のよいモデルを提示したりして、自ら工夫して書けるよう繰り返し取り組む。 ・算数科においては、思考・判断・表現力向上にむけた活用型の問題に取り組み、自分の言葉で説明したり書いたりできるようにする。 ・引き続き、支援の必要な児童においては、モジュールや放課後を活用して個別指導を充実させていく。	◎			
			○ICTの活用 【マイプレゼン年3回以上】	【ICTの活用】 ①ICTを授業で活用→ICTの活用計画 ②タイピング検定の取り組み→記録会を設定 ③職員間の研修による交流→教職員の研修計画の充実	マイプレゼンの実施	年3回以上	現段階100%			A	9月末現在、どの学級でも1～2回プレゼンテーションソフトを使った発表を行い、現段階で達成すべき回数以上行うことができた。 〈成果〉 職員間の研修を重ねたことで、教職員のスキルが高まりICTの活用場面を増やすことができた。 〈課題〉 ICT活用の質を高めるために、情報モラル教育の実施やタッチタイピングの練習等を通して、情報活用能力を高める必要がある。	○日常的にICT端末を活用することで、教職員や児童の情報活用能力を高める。 ・タイピング検定や記録会を行い、児童が効率的に作業を行えるようになり、より質の高い活用につなげる素地を養う。 ・「情報モラル学習サイト」を活用した情報モラル教育の実施を行い、よりよくICTを活用する力を高める。	◎			
豊かな心	○親和性の高い集団づくり 【HyperQU・全児童学級生活満足群へ】	生徒指導・保健部	○目標に向けて、仲間と共に考動・協働できる子どもを育てる。 【親和性に関わる項目児童肯定的評価85%以上】	【目指す姿に向けたPDCA】 ①学級チャレンジ・・・・・・学級目標の設定と評価活動 ②幸崎っ子　10の姿の設定と共有化	HyperQU 児童アンケート	児童肯定的評価85%以上 児童アンケート肯定的評価80%以上】	112% 115%			A	ハイパーQUによる、親和性を図る項目においての達成率は95%であった。 児童アンケートによる肯定的評価は92%であった。 ＜成果＞ 幸崎っ子10の姿と学級チャレンジをリンクさせて各学年で目標を立てて取り組んだことにより、相乗効果が生まれた。また、縦割り班活動では、児童会本部主催の「縦割り班遠足」、「1学期がんばったね会」のウォークラリー、栽培委員会主催の縦割り班対抗の草抜き大会を、児童自らが企画・運営して主体的に取り組むことができた。その中で、班長が中心となって班旗を作ったり、班で交流したりする中で親和的な関係性が育まれてきた。 「幸崎スポーツフェスティバル」では、オープニングとエンディングを縦割り班で、表現活動や団体競技を1年と6年、2年と5年、3年と4年とペア学年で行う中で、親和的な関係性を構築することができた。 ＜課題＞ 肯定的評価の割合85%は達成しているものの100%となるよう、取り組んでいく。	○縦割り班リーダー・フォロワーの育成を図り親和性を高める。 ・役割分担を明確にした縦割り班活動の充実 1学期は教員がバックアップする場面が多くあったが、2学期からは、文化フェスティバル等の行事を通して、児童が自ら考え行動する機会を意図的に増やしていく。また、リーダーを固定せず、全員がリーダーとフォロワーの両方を経験することで、全員が主体的且つ、多角的な視点で物事を判断し協働する力を育成する。3学期は、児童会が運営する行事だけでなく、、学校全体から実行委員を募って、さよなら遠足等の行事を運営することで、多様な仲間と協働できる親和性を高めていく。 ○学級経営の充実を図る。 ・学級経営の勉強会の実施 ・特別活動の充実 2学期からは縦割り班活動を縦糸、学級経営を横糸ととらえ、学級経営の充実も合わせて図っていく。	◎			・親和性の向上に向けて取組が工夫されている。 ・学校が楽しい、仲間と一緒に力を合わせることが楽しいと思っている児童が多いのは非常に喜ばしい。 ・幸崎スポーツフェスティバル等異学年での活動においても、子ども達が主体的に取組を進められていることが伝わってきた。 ・縦割り班や異学年交流等多様な他者と関わる素晴らしい取組を今後も継続してほしい。
			◎縦割り班・異学年を軸とした自治的な学び 【児童アンケート肯定的評価80%以上】	【縦割り班・異学年活動】 ①幸崎スポーツフェスティバル・幸崎文化フェスティバル ②児童会本部を中心とした自治活動の充実 ・縦割り班遠足　4月・3月 ・学期ごとのがんばったね会 ・縦割りフェスの実施（本部・委員会）										◎			
健やかな体	○運動に対する意欲の向上 【個人記録の結果が全員UPする】	生徒指導・保健部	○体を動かすことを楽しませ、体力を向上させる。 【個人記録の結果の向上率90%以上】	【運動に対する児童の意欲向上】 ①縦割り班を活かしたスポーツフェスティバルやリレーの実施 ②委員会活動の活性化→楽しみながら体を動かす→幸崎ダンス・鬼ごっこ・外遊びを奨励	個人記録の結果	個別の向上率90%以上	—			—	仲間と協働して主体的に運動に取り組む児童の姿が多く見られた。 ＜成果＞ 縦割り班を生かしてスポーツフェスティバルを実施したり、中学生を含めたリレーを実施したりすることで、楽しみながら体力を向上することにつながってきた。 ＜課題＞ 体力テストについて、ソフトボール投げ及び反復横跳びに課題が見られた。今後、記録が伸びるように指導することが必要である。 体育の授業で、運動量を確保する時間を設ける。	○課題や目標の見える化を図る。 ・運動のポイントを動画視聴できるようにし、児童が必要な時に自ら活用できるようにする。 ○運動に対する児童の意欲向上を図る。 ・体育の授業におけるサーキット運動の徹底を学校全体で取り組み、体力の底上げを図る。 ・体育の授業での準備運動を運動遊びに変えることにより、楽しみながら体力向上ができるようにする。 ・保健委員会等が体力の高まる遊びを紹介することで、外遊びを奨励していく。	◎			・大きな声で元気よく活動する姿が見られるのが嬉しい。 ・運動が苦手な児童でも、楽しみながら体を動かすことにエネルギーを集中することで爽快感が得られると思う。 ・意欲と自信につながるように楽しみながら体力向上に取り組まれていることを評価する。
地域に信頼される学校	○小中一貫・地域協働による教育活動の充実を図り、郷土を愛する心を養う。 【一校一貢献】 【小中一貫教育】	教務・研究部	○幸崎の強みを生かした探究的な学習を展開し、自分や友達、郷土を愛する心を養う。 【児童アンケート肯定的評価80%以上】	【探究的な学習→小中一貫教育】 ①「自分物語」　中学校3年生の表現活動に向けた学習 　→フェスティバルに関わる学習を中心に ②「幸崎物語」　幸崎の地域・防災について学ぶ学習 　→6年～中1：防災・地域　　1年～5年：地域学習	児童アンケート	自分や友達、学校や地域に対する愛着に関するアンケート項目の肯定的評価80%以上	112%			A	児童アンケートの結果は「自分や友達、学校、地域が好き」が90.2%、「よさが言える」かの項目が89%であった。 ＜成果＞ 縦割り班や小中連携による異学年での学びを、生活や授業、行事などで取り組むことで、自分やその周りとの多様な関係が育まれ、自分や友達、学校や地域に対する愛着が高まった。 ＜課題＞ 自分や友達、学校や地域への愛情や認識をさらに深めるために、地域の方や地域の事についての理解をより豊かなものにする必要がある。	○引き続き異学年交流の取り組みを進める。 ・文化フェスティバルに向けてペアの学年で目標を立ててよりよいかかわり方ができたか視点をもって振り返ることで、友達とのかかわりをより豊かにする。 ○地域の方との交流や地域学習をより豊かにする。 ・地域の方と一緒に地域を学ぶイベントを行い、地域とのかかわりや地域に対する理解を深める。	◎			・小中一貫教育の取組は、効果的な活動を見定め、今後も継続してほしい。 ・地域のよさを学ぶ取組の成果が出ていると感じた。先生方がやりがいをもって取り組んでいるからこその成果だと思う。 ・小中連携は発達段階が大きく異なるため難しい点も多いと思うが、できることから積極的に取り組まれていることがよい。 ・これまでの地域との交流の成果がアンケート結果に出ており、今後とも地域との充実した交流活動を期待している。
	○チーム幸崎として、業務改善を図る。 【時間外勤務時間目標総時数　達成率100%】	総務部	○在校時間を短縮する。 【年間平均45時間以内の職員100%】	【適材適所の人材配置による業務改善】 ①個性を発揮できる職務に就かせて一人一人のモチベーションを高めることでの業務効率化UP ②建設的な雰囲気の醸成によるチーム力の向上	時間外 勤務時間数	年間平均45時間以内の職員100%	100%			A	＜成果＞ ICTを活用した業務の効率化、親和性の高い職員集団への成長による業務の平準化が進み、「リーム幸崎」として全職員で取り組む雰囲気が醸成され、業務改善が促進された。その結果、現時点において全職員平均在校時間が45時間以内となっている。 ＜課題＞ それでも、やはり、在校時間が長い職員がいることも事実である。	○以下の取組を推進し、職員一人一人のモチベーションを高め、職員のチーム力の向上を図る。そして、さらなる業務改善に取り組む。 ・低、中、高の学年部での活動 ・各主任を中心とした部の計画的な運営 ・職員室におけるOJTの活性化 ・部を超えた言動の価値づけ	◎			

本年度の重点目標については◎印で示す。